



## 新司法試験合格者体験談

「合格のイメージを持っていますか？」

市橋 卓

勉強方法については、他の人に任せて、視点を変えて考えてみましょう。皆さんは、こういった点数配分で合格しようと考えていますか？

新司法試験は、短答式175点満点、論文式1科目175点・8科目の合計で、合否が決まります。合否だけでいえば、論文で点を稼ごうが、短答式で点を稼ごうが、合計点が合格ラインを超えていけばいいのです。短答式は得意ですか？勉強したらただ点数とれますか？高得点を狙いますか？足切りを超えていけばいいですか？論文式は得意ですか？苦手科目は何科目ですか？得意科目はどれくらい高得点とれますか？

A	合格最低点	765	765
B	短答式点数	210	280
B/2	短答式点数/2	105	140
A-B/2	合格に必要な論文式の点数	660	625
(A-B/2)/8	一科目当たり必要な点数①	82.5	78.13
(A-B/2)/8*4/7	一科目当たり必要な点数②	47.14	44.64
(A-B/2)/8*4/7	②の累積割合	37%	48%

【平成23年度新司法試験】

65点	上位2%
60点	上位6%
55点	上位13%
50点	上位27%
45点	上位44%
43点	上位50%

【②の累積割合の目安】

短答式苦手な人は、論文式すべての科目で、上位4割以内でなければ合格しません。逆に短答式得意な人は、論文式すべての科目で、平均よりちょっといい点で合格します。

また、論文式の得意科目で点数を稼ぐのは、簡単なことではないと思われまます。

さて、皆さん、自分が各科目どういった点数で合格するのか、いわば戦略は決まりましたか？

その点数をとれるだけの勉強をしていますか？有限な時間をちゃんと分配できていますか？考えてみてください。

「新司法試験に教わったこと」

稲井 雄介

1. 授業の利用方法：私はロースクールでの授業を重視し、特に、新司を十分に意識して教授下さる先生の授業は積極的に利用しました。ただ、新司は受験テクニックの要素も含むため、授業への取り組みは必ずしも新司の得点に直結するわけではありません。授業は、あくまで自身で学習を進める基盤を提供するものと割り切るべきです。
2. 新司に向けて：3年次夏期以降、私の論文試験対策は日課として答案を書くことでした。答案練習の際には、構成のみにとどめず、規定の時間を計って実際に手を動かすことが肝要だと思います。問題は様々なものを用いましたが、特に、新司過去問には2年次から挑戦し、以後、二度、三度と反復して解きました。過去問は目指すべき到達点に関する最良の資料であり、学習計画の決定から問題集・参考書の選択まで全ての基礎となります。また、過去問分析が授業の内容に対する理解を深めてくれる場合もあります。可能な限り早期に取り組むべきでしょう。
3. ゼミの利用方法：前述の答案作成は、すべてゼミ（平日午後7時～10時前後、4～6名）で行いました。答案作成後はメンバー

間で議論し、疑問点を明確化、各自調査・検討した後、情報交換するなどしました。ゼミは一面では有益ですが、それに依存してしまわないよう注意が必要です。私たちのゼミでは、各自が自由な（別々の）問題を解く日を設けることで、自主性を確保していました。

4. 私が得た教訓：授業もゼミも、単に受動的にこなすだけでは得るものは少ないと思います。作業量に満足せず、自身の達成度を冷静に分析し、主体的に取り組むことが重要です。また、答案練習では、自分で「良く書けた」と思う答案ほど疑って下さい。特に、新司過去問についてそのように感じるのには、自身の理解不足が原因である可能性が高いでしょう。本番で信じるに足るのは、最後まで自身の理解を疑い続けた自分だけです。

「早めに短答を完成させて、しっかり論文対策を！」

永井 翔太郎

私は、今年3回目の受験で幸運にも合格することができました。報告者の中では唯一の3回目合格者ということで、過去2回と今年の違いという切り口から話を始めたいと思います。

過去2回と今年の違いは、短答対策は、記憶喚起のため2ヶ月前から復習するのみにした点です。短答は2回目の時点で265点をとれていたため、短答には自信がありました。その分、しっかり論文対策ができ、最終合格につながったのかなと感じます。短答に自信がないと、経験上直前期にはその勉強に専念してしまい、論文対策まで手が回らなくなります。短答をできるだけ早く完成させ、しっかり論文対策をすることが大切です。

そこで、私の短答対策を紹介したいと思います。短答の点数を上げるコツは、自分にあった勉強方法に出会うことだと思います。自分に合っていない勉強方法では勉強しても勉強しても、点数が伸びず苦しいだけです。私は、初めのころ過去問や予備校の問題を解く問題演習型の勉強をしていましたが、全く点数が伸びませんでした。そんなとき、試しに買った予備校の択一六法をベタ読みしていると、問題演習よりも知識がすんなり頭の中に入る感覚がしました。その感覚を信じ、勉強方法を択一六法のベタ読み型に変えてからは、勉強した分野は必ず点数が伸びるという状態になり、短答の勉強が楽しくなりました。もちろん、この逆にベタ読みの方が辛いという人もいます。要は、いろいろな方法で勉強してみて、他人が何と言おうと自分がじっくりく勉強方法を見つけることが一番大切です。

自分にあった勉強方法で、早めに短答を完成させることが最終合格につながると思います。頑張ってください。

「合格体験記」

根岸 大将

合格するために必要なことを3つに分けて述べます。

第一に、自分の能力を客観的に把握することが必要です。闇雲に勉強をする前に、自分が受験者の中でどれくらいの位置にいるのか、自分の苦手分野と得意分野、択一と論文の得意度などを把握し、勉強時間の配分をすることが大事になってきます。これは日頃の勉強や、定期テスト、答練などを通して行えると思います。

ここで把握した苦手科目については、①自分に合う基本書を探す、②その分野が得意な友人に質問をしたり一緒に勉強をしたりする、等の方法が効果的です。私に関しては自分にとってわかりやすい基本書が見つかるまで、各科目数冊は吟味しました。また、特に純粋未修の方などで体系的な理解が出来ていない方は、理解しにくい所があった場合は一度飛ばしてから戻ってくるとう理解できることが多いかもしれません。

第二に、効率の良い勉強をすることが必要です。勉強時間は長ければいいというわけではなく、例えば苦手分野と得意分野の勉強の時間配分などは一つの例です。その他にも択一のための勉強を択一プロパーで終わらせずに、常に論文を意識しながら勉強することで効率の良い勉強ができると思います。

最後に、合格するためにはモチベーションの維持が不可欠です。特に一年目で合格出来なかった人は、周囲の多くが合格し、学部同期が社会人として活躍する中で、いかにくじけずに勉強を続けられるかが鍵になってきます。例えば、信頼できる友人に相談をしたり、趣味で息抜きをする等してモチベーションを維持できるように心がけてください。

### お問い合わせ

大阪大学大学院高等司法研究科  
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-6  
TEL：06-6850-6948  
HPアドレス <http://www.lawschool.osaka-u.ac.jp/>

### 発行元

大阪大学大学院高等司法研究科  
発行：2011年11月15日



OJLS  
Osaka University Law School  
ニュースレター

新司法試験特集号

No. 8

## 研究科長からのメッセージ

高等司法研究科長  
谷口 勢津夫

高等司法研究科のニュースレター第8号をお届けします。

本号のトピックは平成23年（第6回）新司法試験の結果（9月8日発表）とその分析です。高等司法研究科からは171名が受験し49名が合格しました（合格率28.7%）。法科大学院が「完成年度」を迎えた後の平成20年以降の試験について合格者・率をみると、平成20年が49名（127名受験）38.6%、平成21年が52名（155名受験）33.5%、平成22年が70名（180名受験）38.9%でしたから、今回の結果が極めて厳しいものであることは明らかです。このことを研究科としても深刻に受け止めており、対策を検討し実施に移してきましたが、その第1弾として、合格発表の1週間後（15日）に不合格者を対象にガイダンスを実施しました。十分な準備期間がなかったにもかかわらず、43名もの修了生が集まり、先輩方の話に非常に熱心に耳を傾け意見交換をしていました。在學生、とりわけ3回生にも衝撃が走ったようで、「緊張感が高まった」、「気分が引き締まった」というような声を何人もから聞きました。研究科としても、彼らをできるだけサポートすることとし、捲土重来を期しております。

そのような気持ちは、9月29日に開催された恒例の合格祝賀会で一層強くなりました。合格祝賀会は例年以上に合格者の出席率がよく、また、合格者のスピーチも個性豊かなものが多く、盛り上がりました。2次会、3次会と彼らと酒を酌み交わしながらいろいろな話を聞いたのですが、仲間や後輩、さらには高等司法研究科に対する彼らの思いに強く心を打たれました。彼らの思いに答えられるよう頑張るつもりです。



平成23年新司法試験合格者祝賀会



# 平成23年新司法試験の結果について

副研究科長 水谷 規男

2011年9月8日に第6回の新司法試験の合格発表がありました。本研究科の修了生は、171人が受験し、最終合格者は49人でした。昨年は70人の合格でしたから、この結果は本研究科にとって相当に厳しいものです。この結果を真摯に受け止めるとともに、的確な原因分析をして対策を講じ、来年度の試験を迎えたいと考えています。

今年度は、本研究科修了生125人が短答式試験に合格しましたが、最終合格者は49人とどまりました。昨年までは、短答式試験の合格者の約半数が最終合格していましたので、ごく単

純化した形で総括すれば、「短答式ではそこそこ健闘したが、論文で苦杯を嘗めた者が多かった」ということになるでしょう。下の表からも分かるように、短答合格者の合格率で見たときに、40%を下回ったのは、今年度がはじめてです（表1参照）。また、大学別の順位で見ると、合格者数では11位（昨年度は7位）、合格率（対受験者）では14位（昨年度は8位）に後退しました。在学中の成績上位者の中でも不合格が目立ち、昨年までのような学内成績と新司法試験の可否とのきれいな相関性が崩れたことも今年の特徴です。

【表1】受験者・合格者の推移

年度		H18	H19	H20	H21	H22	H23
受験予定者数 (A)	全国 阪大	2125 21	5280 87	7710 146	9564 197	10908 236	11686 210
受験者数 (B)	全国 阪大	2091 21	4607 73	6261 127	7392 155	8163 180	8765 171
受け控え率 (A-B/A)	全国 阪大	1.6% 0.0%	12.7% 16.1%	18.8% 13.0%	22.7% 21.3%	25.2% 23.7%	25.0% 18.6%
短答合格者数 (C)	全国 阪大	1884 17	3479 54	4654 103	5055 110	5773 145	5654 125
短答合格率 (C/B)	全国 阪大	90.1% 81.0%	75.5% 74.0%	74.3% 81.1%	68.4% 71.0%	70.7% 80.6%	64.5% 73.1%
最終合格者数 (D)	全国 阪大	1009 10	1851 32	2065 49	2043 52	2074 70	2063 49
対受験者合格率 (D/B)	全国 阪大	48.3% 47.6%	40.2% 43.8%	33.0% 38.6%	27.6% 33.5%	25.4% 38.9%	23.5% 28.7%
短答合格者合格率 (D/C)	全国 阪大	53.6% 58.8%	53.2% 59.3%	44.4% 47.6%	40.4% 47.3%	35.9% 48.3%	36.5% 39.2%

次に既修・未修別の状況を見てみます（表2参照）。阪大の既修者は、初年度を除き全体で見れば、全国平均に比べて高い合格率を残してきました。しかしながら、今年度は全国平均との差が小さくなっていることが分かります。その原因は直近年度の修了者の合格率が急激に低下したことによるものと考えられます（直近年度の修了生が全国平均を上回る結果を残せなかったのは、平成18年度と今年度だけです）。

【表2】既修者の合格率（合格者/受験者）

	H18	H19	H20	H21	H22	H23
既修全体・全国	48.3%	46.0%	44.3%	38.7%	37.0%	35.4%
既修全体・阪大	47.6%	68.8%	75.0%	56.4%	55.3%	44.2%
直近年度修了・全国	↑	47.1%	51.3%	48.7%	46.4%	41.8%
直近年度修了・阪大	↑	85.7%	80.0%	61.8%	67.7%	41.7%

また、当初3年間は入学者選抜の段階で内部振り分け方式を取っていたため、既修者の数が少ないという特徴がありましたが、それ以降は既修入学者を徐々に増加させてきました。それに伴って既修者全体の合格率が下がってきていることが分かります。既修入学者であっても、入学時の学力が十分でない者が相当数存在する、という現実を直視した学生指導が必要であることをあらためて認識せざるを得ません。

次に未修者の状況を見てみます。阪大の未修の修了生は、ほぼ一貫して全国平均より高い合格率を残していることが分かります。しかしながら、率が高い年でも30%台にとどまっている現実、学生、修了生の立場から見れば深刻です。法科大学院制度は、未修者でも3年間の学修で法律家になれるだけの実力を身に付けさせることを制度的な目標にしていたはずですが、しか

し現実には、法曹を志して仕事を投げ打ち、あるいは他学部などから法科大学院に入学しても、（表4の累積合格率の実績から見ても）2人に1人程度しか法曹になれない、ということになるからです。本研究科では、ここ3年ほど再チャレンジプログラムによる学習支援など未修者対策に力を入れてきました。しかし、その効果が数字の上でも現れているとは言えないようです。

【表3】未修者の合格率（合格者/受験者）

	H19	H20	H21	H22	H23
未修全体・全国	32.3%	22.5%	18.9%	17.3%	16.2%
未修全体・阪大	36.8%	31.8%	25.9%	33.1%	21.8%
直近年度修了・全国	↑	23.7%	22.2%	21.0%	23.7%
直近年度修了・阪大	↑	37.1%	21.3%	33.3%	30.2%

新司法試験には、修了後5年のうちに3回という受験回数の制限があります。一般に2回目受験、3回目受験と回を重ねるごとに合格率自体は低下していく傾向にありますが、阪大の修了生に関しては、既修者では8割以上、未修者でも5割程度の実績を残しているといえます（表4）。少なくともこのレベルを保ち、さらに向上させていく必要がありますから、2回目以降の受験となる修了生へのサポートが重要です。すでに後援基金の資金援助によってOB弁護士が少人数で指導する修了生向け勉強会などの取り組みが行われていますが、今年度は直近年度修了生の不振が

目立ちますから、修了生支援の取り組みについて、各位の更なる支援をお願いしたいと思います。

来年度からは、入学定員を100人から80人に減じた体制での修了生が新司法試験を受験します。法科大学院の志望者自体の大幅な減少という厳しい状況の中ではありますが、本研究科としても昨年度から教育の質の向上を目指した取組みを強化してきました。今年度の結果を踏まえ、学生のニーズに合った学習支援を模索しながら、捲土重来を期したいと思います。

【表4】累積合格者数、累積合格率（合格者/修了者）

修了年度	H17	H18	H19	H20	H21	H22
修了者数（うち未修者）	21	77(70)	95(79)	119(84)	104(69)	93(55)
累積合格者数（うち未修者）	17	45(38)	54(41)	64(36)	54(27)	28(13)
累積合格率（全体）	80.1%	58.4%	56.8%	53.8%	51.9%	30.1%
累積合格率・既修	↑	100%	81.3%	80.0%	77.1%	39.5%
累積合格率・未修	—	54.2%	51.8%	42.9%	39.1%	23.7%

## 新司法試験合格者体験談

本研究科では、学生委員会（学生のクラス代表で構成する組織）の企画・進行により、高等司法研究科後援基金及び大阪大学法学会の後援を得て、9月29日（木）午後5時から豊中総合学館4階401講義室において、新司法試験合格体験報告会・合格まっちゃん会（待兼山茶話会）を開催しました。

このたびは、当日披露された新司法試験合格者の体験談のうち、4名の体験談について、その概要をお届けします。



平成23年新司法試験合格体験報告会